

プログラム・ノート

山田治生

ヨハネス・ブラームス(1833～97)の“第2番”の室内楽曲を集めたプログラム。今回演奏される3曲は、どれも長調で、1880年代の夏に保養地であるパーティシュルやトゥーンで書かれた。

ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 作品100

ブラームスは1886年から1888年までの夏をスイスの保養地トゥーンで過ごした。ベルンに住む友人で詩人のヴィトマンのすすめによるという。そして1886年夏には、主にヴィトマンの邸宅で演奏できる室内楽曲を作った。チェロ・ソナタ第2番(作品99)、ヴァイオリン・ソナタ第2番(作品100)、ピアノ三重奏曲第3番(作品101)などである。それらは交響曲第4番(作品98)とヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲(作品102)の間に位置する。

ヴァイオリン・ソナタ第2番は、3曲あるヴァイオリン・ソナタのなかで、最も明るく、穏やかで、旋律的といえるだろう。第3楽章冒頭ではヴァイオリンがG線でしなやかにロンド主題を歌う。

チェロ・ソナタ第2番 ヘ長調 作品99

ブラームスが残したチェロ・ソナタは作品38と作品99の2曲のみである。チェロ・ソナタ第2番は、上述のように、ヴァイオリン・ソナタ第2番とともに1886年夏に保養地トゥーンで書かれた。第1番は3楽章構成の短調であったが、第2番は、交響曲のような4楽章構成をとり、明るく、力強く、スケールの大きな音楽となっている。

第1楽章は、チェロが明るく情熱的な第1主題で始まる。**第2楽章**は、第1楽章とは対照的なしみじみとした音楽。**第3楽章**は、暗い情熱を湛えたスケルツォ的な性格を持つ楽章。**第4楽章**は、チェロが提示する穏やかなロンド主題が中心となる。

ピアノ三重奏曲第2番 ハ長調 作品87

1880年夏、ブラームスは、オーストリアの保養地パーティシュルでピアノ三重奏曲第2番を書き始めた。その夏にはそこで『大学祝典序曲』作品80と『悲劇的序曲』作品81も作曲した。1882年、ブラームスは再びパーティシュルを訪れ、夏、四半世紀ぶりとなるピアノ三重奏曲を書き上げた。50歳を前にしたブラームスの円熟の作品。

第1楽章はヴァイオリンとチェロがユニゾンで力強く第1主題を提示する。**第2楽章**でも弦楽器がユニゾンで主題を提示。主題と5つの変奏とコーダからなる。**第3楽章**はスケルツォ。弦楽器の同音の刻みが不気味な主部と、レガートで雄弁な旋律の中間部。**第4楽章**でも弦楽器がユニゾンで主題を提示する。